

Remodelling of femoral head-neck junction in slipped capital femoral epiphysis : a multicentre study

秋山, 美緒

<https://doi.org/10.15017/1441095>

出版情報 : 九州大学, 2013, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

氏 名：秋山 美緒

論文題名：Remodelling of femoral head-neck junction in slipped capital femoral epiphysis: a multicentre study
(大腿骨頭すべり症における大腿骨頭頸部移行部のリモデリングに関する検討～多施設共同研究～)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

大腿骨頭すべり症 (Slipped capital femoral epiphysis; SCFE) は、学童期に好発し、大腿骨の骨端核が頸部より後下方にすべる疾患で、変形が残存すると将来変形性股関節症への進展が危惧される。成長に伴いリモデリングを受け変形が改善されることが知られているが、その変形が残存し大腿骨・臼蓋インピンジメント (大腿骨頸部前方が張り出し臼蓋前縁と衝突する病態；Cam-type 変形) を残す症例も少なくない。本研究では安定型 SCFE 症例 56 症例 69 関節の股関節レントゲン画像を用い、SDFE 後の Cam-type 変形を評価した。対照群として片側性一過性股関節炎患児の健側 42 関節を用いた。SCFE 後の Cam-type 変形は、手術直後 62.3% (69 関節中 43 関節) に認め、最終観察時には 29.4% (69 関節中 20 関節) と有意に減少した ($P < 0.0001$)。どちらの時期も対照群に比べ有意に高率であった。(2.4% ; 42 関節中 1 症例 ; $p < 0.0001$ 、 $p = 0.0119$) Cam-type 変形遺残に影響を与える因子は発症年齢・すべり角であり、年齢が高いほど、そしてすべりの程度が大きいほど遺残する傾向にあった。SCFE ではリモデリングにより頸部の張り出しは改善するものの、依然として約 3 割もの症例で Cam-type 変形が遺残し、大腿骨・臼蓋インピンジメントが発生しやすい状況であることが明らかになった。